

## 教師の仕事への不安の要因と教師が協働することの意義

### － 山形県内小学校教員へのアンケートを基に考える －

高野浩男 ・ 香曾我部琢  
(山形大学大学院教育実践研究科) (宮城教育大学教育学部)

The Study on Factor of Anxiety about Teacher's Work alone, and Significance of Teacher's Collaboration

－Based on a questionnaire to elementary school teachers in Yamagata Pref.－

Hiroo TAKANO Taku KOUSOKABE

The work of Japanese teachers has many business contents such as subject guidance, educational guidance, classroom management and so on. And Japanese teachers are in charge of those work alone. Therefore, the teacher works while having anxiety and troubles. Therefore, in recent years, society is demanding that multiple teachers cooperate and work in order to reduce the work of teachers. Therefore, in this research, we clarify what kind of anxiety and trouble the teacher has. Furthermore, we will clarify how we are thinking about the significance of collaboration among multiple teachers. As a result, it became clear that many teachers worked with anxiety and troubles. And it revealed that we are aware of the significance of multiple teachers working together.

[キーワード] 複数の教師による指導体制, 教師の不安, 教師の個業への困難さ

#### 1 問題の所在

##### (1) 教師のメンタルヘルスの不調の要因

文部科学省「公立学校教職員の人事行政状況調査」(2016)では、2016年度の公立学校教員の精神疾患休職者は4891人と全教員の0.53%に相当し、1990年度の1017人と比較すると5倍近くの増加であることが示されている。

このような状況下において文部科学省「教職員のメンタルヘルス対策会議の最終まとめについて」(2013)では、教諭等のメンタルヘルス不調の要因について、

教諭等は、いずれの世代においても、生徒指導や事務的な仕事、学習指導、業務の質、保護者への対応に強いストレスを感じる頻度が比較的高く、具体的には、常に又はときどき強いストレスがあると回答した割合は、生徒指導については約68%、事務的な仕事については約64%、学習指導については約62%、業務の質については約60%、保護者への対応については約57%と

なっている。

と多くの要因が存在することを示した。

##### (2) 教師の協働がもつ効果

教師のメンタルヘルスの不調には複数の要因が存在することが示されたが、その対策として、高橋ら(2008)は、学校という職務構造上の特殊性に考慮して、「同僚性をベースにした協働的生徒指導体制」が有効であることを示している。さらに、落合(2004)においても、業務の多忙化や教師の協働相互サポートの衰退が教師の主体性の喪失を生み、そしてバーンアウトに至るプロセスを示し、教師の協働がメンタルヘルスに大きな影響を与えることが示されている。

また、教師の協働はメンタルヘルスに影響を与えるだけでなく、金田(2010)は、授業研究を教師の協働で実施することで、「差異の交流によって自分自身の見方への気づきと他者からの新しい発見が生まれる」ことを示し、授業検討会の機能を高めることも示した。

### (3) 教師に求められる協働性

教師が協働することの重要性については、文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会(2006)においても、これからの教員に求められる資質能力として「豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくことの総合的な人間力」と述べ、教師が協働することを教師の資質能力として位置付けている。

そこで、本研究では、まず、教師が自らの仕事を進める上でどのような不安、困難さを感じているのかそのメンタルヘルス上の問題点について明らかにする。次に、その結果を踏まえた上で、教師同士が協働することの意義をどのように捉えているのか、その実相を明らかにすることを目指す。

## 2 研究方法

本研究では、まず、教師が実践を行う際に感じる不安の要因を明らかにする。次に、複数の教師で協働することの意義について明らかにする。そのために、不安の有無、その要因について複数回答の質問紙調査を行い、教師が協働することの意義については自由記述を実施する。

### (1) 質問紙の作成について

#### ①不安に関して

本研究では、まず、教師が不安をもつのか明らかにする。次に、その不安がどのような業務によって生じるのか、その要因について明らかにする。要因については、教師一人に対して複数の要因が想定できるため複数回答による質問項目を作成した。質問項目については、文部科学省の教師の業務一覧をもとに作成した。

#### ②教師の個業への困難さについて

次に、教師が学習指導や学級経営について、一人で担当することに対する困難さについての質問項目を作成した。この質問項目については、困難さの有るか、無いかを明らかにするために「どちらともいえない」の項目を外し、4件法であるリッカート尺度を用いることとした。

#### ③複数の教師が協働することへの賛同と意義

最後に、複数の教師が協働することへ賛同するか否かを、4件法のリッカート尺度で質問項目を作成した。さらに、賛同する回答を示した教師に対して、協働することでどんな効果が得られるの

か、その意義について自由記述を行った。

### (2) 分析方法について

分析は、①については $\chi^2$ 検定と多重回答によるクロス集計を用いた、②については、マン・ホイットニーのU検定を用いることとした。③については、賛同についてはマン・ホイットニーのU検定を用いた。いずれの検定についてもIBM社SPSS statistics 24を用いることとした。

最後に、③の自由記述については、KHcoder3を用いて、テキストマイニングの手法を用いて分析を行うこととした。いずれの項目についても、性別と年代間の比較を実施した。

### (3) 研究協力者について

本研究では、質問紙調査を、平成30年5月から同年12月の期間に校内外の研修会に参加した山形県内の村山・置賜地方の小学校教師に対して実施した。実施に際して、文書で研究の要旨を提示し、さらに研究データの取り扱いなどの研究倫理に関する留意事項を口頭で説明し同意を得た。

## 3 アンケートの分析結果と考察

本研究では、上記の校長・教頭・主幹教諭を除く教諭・講師等237名に対して質問紙調査を実施し、1名の欠損データを外して、合計236名(女性121名、男性115名)のデータを収集した。結果を以下に示す。

### (1) 教師が感じる不安

学校(仕事)のことについて、不安があると答えた教師は、236名中187名であった。詳しくは表1に示す。 $\chi^2$ 検定で分析した結果、 $\chi^2(1)=1.013$ で有意な差はみられなかった。

表1 性別による不安

	女性	男性	合計
不安有	99	88	187
無	21	27	48

年代別については、表2に示した。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)=2.118$ で有意な差はみられなかった。

表2 年代による不安

	20-30代	40-50代	合計
不安有	62	125	187
無	10	38	48

(2) 不安の要因

次に、教師の学校での不安の要因について、文部科学省教員勤務実態調査(2015)の「業務の分類」をもとに表 3 に示した 6 つの業務を項目とした。この項目では、複数回答を可としたため、多重回答によるクロス集計を用いて分析を行った。性別ごとの結果は表 3 に示した。女性では、学習指導と生徒指導の比率が女性の半数を超えており、男性では、これらに加えて学校運営が半数を超えた。

表 3 性別による要因の違い

	女性	男性	
学習指導	75	53	128
	<b>75.8%</b>	<b>60.2%</b>	
	40.1%	28.3%	68.4%
生徒指導	60	44	104
	<b>60.6%</b>	<b>50.0%</b>	
	32.1%	23.5%	55.6%
進路指導	2	0	2
	2.0%	0.0%	
	1.1%	0.0%	1.1%
学校運営	35	50	85
	35.4%	<b>56.8%</b>	
	18.7%	26.7%	45.5%
特別活動	14	17	31
	14.1%	19.3%	
	7.5%	9.1%	16.6%
総合学習	13	21	34
	13.1%	23.9%	
	7.0%	11.2%	18.2%
その他	12	6	18
	12.1%	6.8%	
	6.4%	3.2%	9.6%
	99	88	187
	52.9%	47.1%	100.0%

また、年代ごとの不安の要因の違いについては、表 4 のとおり 20-30 代の 7 割以上が学習指導と生徒指導を要因としたのに対して、40-50 代は学習指導と学校運営が 5 割以上であった。

表 4 年代による不安の要因の違い

	20-30代	40-50代	
学習指導	73	55	128
	<b>88.7%</b>	<b>58.4%</b>	
	29.4%	39.0%	68.4%
生徒指導	45	59	104
	<b>72.6%</b>	47.2%	
	24.1%	31.6%	55.6%
進路指導	1	1	2
	1.6%	0.8%	
	0.5%	0.5%	1.1%
学校運営	19	66	85
	30.6%	<b>52.8%</b>	
	10.2%	35.3%	45.5%
特別活動	14	17	31
	22.6%	13.6%	
	7.5%	9.1%	16.6%
総合学習	14	20	34
	22.6%	16.0%	
	7.5%	10.7%	18.2%
その他	3	15	18
	4.8%	12.0%	
	1.6%	8.0%	9.6%
	62	125	187
	33.2%	66.8%	100.0%

(3) 学級担任による個業への困難さ

学級経営を学級担任が一人で担当し、実施することへの困難さについては、236 名中 230 名からデータを得ることができた。そして、性別による違いについては、マン・ホイットニーの U 検定を用いて分析を行った。その結果、表 5 のように有意な差はみられなかった。

表 5 性別による困難さの違い

	女性	男性	合計
よくある	37	35	72
時々ある	69	65	132
あまりない	11	11	22
ない	1	1	2
合計	118	112	230

次に、年代による違いを表6のようにまとめ、マン・ホイットニーのU検定を用いて分析を行った。その結果、年代による有意な違いはみられなかった。

表6 年代による困難さの違い

	20-30代	40-50代	合計
よくある	24	48	72
時々ある	42	92	134
あまりない	6	16	22
ない	0	2	2
合計	72	158	230

#### (4) 困難さの要因

次に、回答を得た230名中204名の困難さを感じている教師に、その要因について質問した。選択項目は、文部科学省教員勤務実態調査(2015)の「業務の分類」をもとに、学級経営の部分をもとめて4つの項目にまとめた。

表7のとおり、5割を超えた項目については、学習指導と生徒指導、保護者対応の3つの項目であり、男女とも同じであった。しかし、女性が学習指導において一番比率が高いのに対して、男性は生徒指導が高いことが示された。

表7 性別による困難さの要因の違い

	女性	男性	
学習指導	73	53	129
	<b>69.5%</b>	<b>56.6%</b>	
	35.8%	27.5%	63.2%
生徒指導	66	72	138
	<b>62.9%</b>	<b>72.7%</b>	
	32.4%	35.3%	67.6%
保護者対応	52	53	105
	<b>49.5%</b>	<b>53.5%</b>	
	25.5%	26.0%	51.5%
学級事務	38	30	68
	36.2%	30.3%	
	18.6%	14.7%	33.3%
その他	8	4	12
	7.6%	4.0%	
	3.9%	2.0%	5.9%

	105	99	204
	51.5%	48.5%	100.0%

年代と困難さの要因について多重応答によるクロス集計の分析を行った。その結果、表8のとおり年代における違いとして学習指導と生徒指導において、20-30代が学習指導の比率が7割を超え、40-50代で生徒指導の比率が7割を超えている点に違いがみられた。また、20-30代では、学級事務が4割を超えていることが示された。

表8 年代による困難さの要因の違い

	20-30代	40-50代	
学習指導	48	81	129
	<b>72.7%</b>	<b>58.7%</b>	
	23.5%	39.7%	63.2%
生徒指導	37	101	
	<b>56.1%</b>	<b>73.2%</b>	
	18.1%	49.5%	67.6%
保護者対応	27	78	
	<b>40.9%</b>	<b>56.5%</b>	
	13.2%	38.2%	51.5%
学級事務	28	40	
	<b>42.4%</b>	29.0%	
	13.7%	19.6%	
その他	4	8	
		5.8%	
		3.9%	
	66	138	204
	32.4%	67.6%	100.0%

#### (5) 複数の教師による指導体制への賛同

次に、教師が協働して学級を指導する体制への賛同について質問を4件法で行った。236名中219名(女性112名、男性107名)の回答を得た。そして、性別による違いについてマン・ホイットニーのU検定による分析を実施した。その結果、男女間に5%水準で有意な差がみられた。表9を参照すると、「よくある」が、女性が多いのに対して、「時々ある」が男性の方が高いことが示された。

表 9 性別による賛同の違い

	女性	男性	合計
よくある	89	71	160
時々ある	20	35	55
あまりない	2	0	2
ない	1	1	2
合計	112	107	219

次に、表 10 のように年代による賛同の違いについて、マン・ホイットニーの U 検定による分析を実施した。その結果、有意な差はみられなかった。

表 10 年代による賛同の違い

	20-30 代	40-50 代	合計
よくある	45	115	160
時々ある	19	36	55
あまりない	0	2	2
ない	1	1	2
合計	154	65	219

(6) 複数の教師による指導体制への賛同理由

①自由記述文の頻出語抽出

最後に、「複数の教師による指導体制への賛同理由」の自由記述を、テキストマイニングの方法を用いて分析した。アンケートデータ 236 名中、17 名の自由記述未記入者を欠損データとし、219 名の自由記述文を分析データとした。その自由記述文を形態素解析にかけて名詞、形容詞、動詞及び副詞を抽出し、出現頻度の高い（出現頻度数 4 以上、30 代は 3 以上の）語を分析対象とした。各群における頻出後の出現頻度を表 11 に示す。全ての群において「子供」の頻出回数が最も多かった。

表 11 性別・年代による自由記述「複数の教師による指導体制への賛同理由」における頻出語の出現頻度

群語	女性	男性	20代	30代	40代	50代
子供	89	46	22	12	36	62
指導	47	21	15	3	23	26
担任	18	29		5	16	22
先生	39	22	13	3	22	21
思う	20	12				18

複数	25	21	7	8	14	18
見る	32	19	16	6	14	15
対応	14	15	4		9	15
学級	17	21	5	3	12	14
目	27	13	10	7	10	14
学校	4	17			7	13
学年	24	16	6	5	15	11
様々	16	11	5	4	7	11
チーム	4	16			9	9
全体	7	8			5	8
支援	9					7
必要	9	10			10	7
理解	13	4			5	7
時間		5				6
出る		4				6
親	5	5				6
多く	15	5	8			6
負担	4	12	4		4	6
基本						4
協力	6	5				4
教育		5				4
経験	5	7			6	4
現在		4	4			4
考え	8	4			5	4
高まる		4				4
今						4
進める		5				4
増える	4	5				4
大切		9			5	4
難しい		5				4
面		6				4
良い	12		6	3	4	
自分	11		7		5	
多い	9	4	5	3		
気付く	6		5			
共有	6					
大変	6		4			
相談	6					
価値	5					
学ぶ	5					
関わる	5					
思える	5					
アイデア	4					

違う	4					
一緒	4					
学習	4					
関係	4					
共通	4					
教科	4	4			4	
賛同	4				5	
同士	4					
変化	4					
責任		8			5	
視点		7				
考える		6				
得意		6				
減る		5				
大きい		5				
不安		5			4	
メリット		4				
感じる		4				
経営		4				
行う		4				
効果		4				
取り組む		4				
授業		4				
生かす		4			5	
部分		4				
力		4				
思う			5		9	
関わる					4	

※数字は出現回数

各群で出現回数の多い語、上位 10 件は、表 12 のとおりである。全ての群において共通して出現している頻出語は「子供」「先生」「見る」「複数」の 4 語である。

表 12 各群における出現回数上位 10 件

群 順位	女性	男性	20代	30代	40代	50代
1	子供 (89)	子供 (46)	子供 (22)	子供 (12)	子供 (36)	子供 (62)
2	指導 (47)	担任 (29)	見る (16)	複数 (8)	指導 (23)	指導 (26)
3	先生 (39)	先生 (22)	指導 (15)	目 (7)	先生 (22)	担任 (22)

4	見る (32)	学級	先生 (13)	見る (6)	担任 (16)	先生 (21)
5	目 (27)	指導 複数	目 (10)	学年 担任	学年 (15)	思う
6	複数 (25)	(21)	多く (8)	(5)	見る 複数	複数 (18)
7	学年 (24)	見る (19)	自分 複数	様々 (4)	(14)	見る 対応
8	思う (20)	学校 (17)	(7)	学級 指導 先生等	必要 目 (10)	(15)
9	担任 (18)	チーム 学年	学年 良い (6)	(3)	チーム等 (9)	学級 目 (14)
10	様々 (16)	(16)				

※ ( ) 内は出現回数

②自由記述(複数教師指導に賛同する理由)の共起ネットワーク

アンケートに回答した教師が「複数の教師による指導体制」についてどのような印象をもっているのか、その様相を明らかにするために、共起ネットワークを性別・年代ごとに抽出した。Subgraph は、表 11 のそれぞれの頻出語(出現回数 4 回以上)がネットワーク構造の中で、どの程度中心的役割を果たしているかを中心性によって色分けしてグループ分けしている。また、円の大きさは語の出現数に応じて変化している。

図 1 から図 4 が女性・男性・20 代・40 代の共起ネットワークである。年代については頁の都合上 20 代と 40 代を取り上げることとする。各共起ネットワークの Subgraph から中心となる単語を「」で、それらから解釈できる回答者の複数指導に対する様相を『』で示す。

a) 図 1 : 女性の共起ネットワーク

8 の Subgraph に分けられる。01 は、「自分」「気付く」「良い」「支援」等から『自分だけでは気付くことができない良い支援』と解釈できる。02 は、「同士」「考え」「賛同」等から、『同士の考えが一致すれば複数指導に賛同できる』という解釈ができる。03 は、「チーム」「相談」「負担」「必要」等から『チームで相談することが必要』や『チーム対応で負担が減る』という解釈が可能である。04 は、「様々」「アイディア」等から、複数指導により『様々なアイディア』が生まれることを示唆し

ている。05 は、「学年」「学校」「全体」から、指導にあたっては『学年や学校全体で』という解釈ができる。06 は、「学級」「学習」等から『学級での学習』における課題を教師が感じている事実を読み取ることができる。07 は、「共通」「理解」から『共通理解』の重要性を示している。08 は、最も中心性の強かった「子供」「指導」「先生」「複数」「目」等から『複数の多くの目で先生が子供を見る指導』の必要性を示している。

b) 図 2：男性の共起ネットワーク

7 の Subgraph に分けられる。男性の 02 は女性の 05 と、男性の 03 は女性の 03 と、男性の 05 は女性の 08 と、男性の 07 は女性の 03 と同様である。一方男性に特徴的なのは、01 と 04 である。01 は、「メリット」「感じる」「多い」等から、複数指導へ『メリットを感じる』『メリットが多い』という解釈ができる。一方で「学校」「難しい」「多く」等から、『学校の問題が多く難しい』という学校全体の問題意識に着目している点については、女性に見られなかった点である。04 は、「経験」「先生」「指導」等から、複数指導により『経験のある先生からの指導が増える』という捉えである。

次に年代で、20 代と Subgraph 数が一番多い 40 代の共起ネットワークについて見ていく。

c) 図 3：20 代の共起ネットワーク

5 の Subgraph に分けられる。01 は、最も中心性の強かった「子供」「先生」「見る」「複数」「目」等から『複数の先生が多くの目で子供を見ることで良い点に気付く』という解釈が可能である。02 は、「学年」「指導」「負担」「少ない」等から『学年での指導が負担少ない』という解釈ができる。03 は、「関わる」「悩み」「共有」「安心」等から『関わることから悩みが共有され安心感が生まれる』という解釈ができる。04 は、「様々」「視点」から『様々な視点』で子供を見ることができるといって複数指導の長所を示している。05 は、「現在」「若手」「担任」「行う」「進める」等から、『若手の担任が行う(進める)』という現在置かれている自分の立場に対する不安を示唆している。

d) 図 4：40 代の共起ネットワーク

9 の Subgraph に分けられる。40 代の 01 は、20 代の 02 と、40 代の 02 は、20 代の 04 と、40 代の最も中心性の高い「子供」が入る 06 は、20 代の 01 と、40 代の 07 は、20 代の 01・04 と、40 代の 09 は、20 代の 02 と同様である。40 代に特徴的な

のは、03, 05, 04 と 08 である。03 は、「チーム」「対応」「必要」「学校」等から、『学校でチーム対応の必要性』を感じていることが解釈できる。04 は、「様々」「不安」から、複数指導の長所を認識しつつ『様々な不安』を感じていることが示されている。05 は、「得意」「分野」「生かす」等から、複数指導により『得意分野を生かした指導』が可能になると解釈できる。08 は、「経験」「やり方」等から『これまでの経験ややり方』を学年等で生かすことができるという解釈である。

#### 4 総合考察と今後の展望

##### (1) 教師の不安

本アンケートから、多くの教師が学校での仕事に不安をもっており、学習指導や生徒指導上の不安だけでなく学校運営や特別活動の指導等、複雑に要因が絡み合って不安が一体化している様相が見えてきた。そのような全体的な傾向にある現状の中、特徴的な点として次の 2 点があげられる。

まず、女性よりも男性の方が「学校運営(校務分掌)」に関して不安と捉える傾向にあることについては、男性の共起ネットワークで見られた学校全体の問題意識に着目していた点からも確認することができる。また、同様に、年代が上がるにつれて、「学校運営(校務分掌)」に関して不安と感じる傾向にあり、40 代の共起ネットワークからは学校全体の視点に立った『学校でチーム対応の必要性』の解釈が出現している。いずれも、教師の不安を、教師一人ではなく、学校全体の指導による「教師間の協働性」を通して解決を図ろうとする傾向が表れている。

##### (2) 学級担任の困難さの捉え

まず、「学級担任の困難さ」において特徴的な点は、20 代と 30 代のいわゆる若手は、「学習指導」に困難さを感じているが 40 代と 50 代のいわゆるベテランは、「生徒指導」に困難さを感じている傾向にある。このことは、共起ネットワークにも出現している。ベテランの共起ネットワークからは「チーム」「対応」の語が見られるが若手には出現していない。20 代の教師は、学校全体よりも自分自身に目が向いて日々の学習指導等に追われている感が 20 代共起ネットワークから読み取ることができる。

##### (3) 複数の教師による指導体制

共起ネットワークの知見として、性別や年代を

問わず、中心的な役割を果たす頻出語「子供」を含んで、『子供を複数の先生が目で見ると』という Subgraph が示された。この知見から、世代・性別を問わず多くの教師が複数教員で子どもを指導することをメリットとして捉えていることが理解できる。先述のとおり、多様な問題を抱える教師の実態を考えると、もはや教室という限られた環境で閉鎖的な関わりをしていられない現状にある。このことを考えれば、性別や年代を問わず『子供を複数の先生が目で見ると』という様相が示されたことは当然であり、教師が協働性を強く望んでいることを示している。

#### (4) 今後の展望

教師の不安の要因としてあげた、「特別活動」や「総合的な学習の時間」については、共起ネットワークから直接的なそれらに関する記述は見られなかった点は興味深い。しかし、その要因については本研究からは明らかにすることはできなかった。今後の研究の課題としたい。

また、学校・学年・学級経営の在り方さらには校内研究の進め方等において、多くの教師が望んでいる「協働」の視点を、どのように取り入れ仕事の改善を図っていけばよいかについても今後の課題としたい。

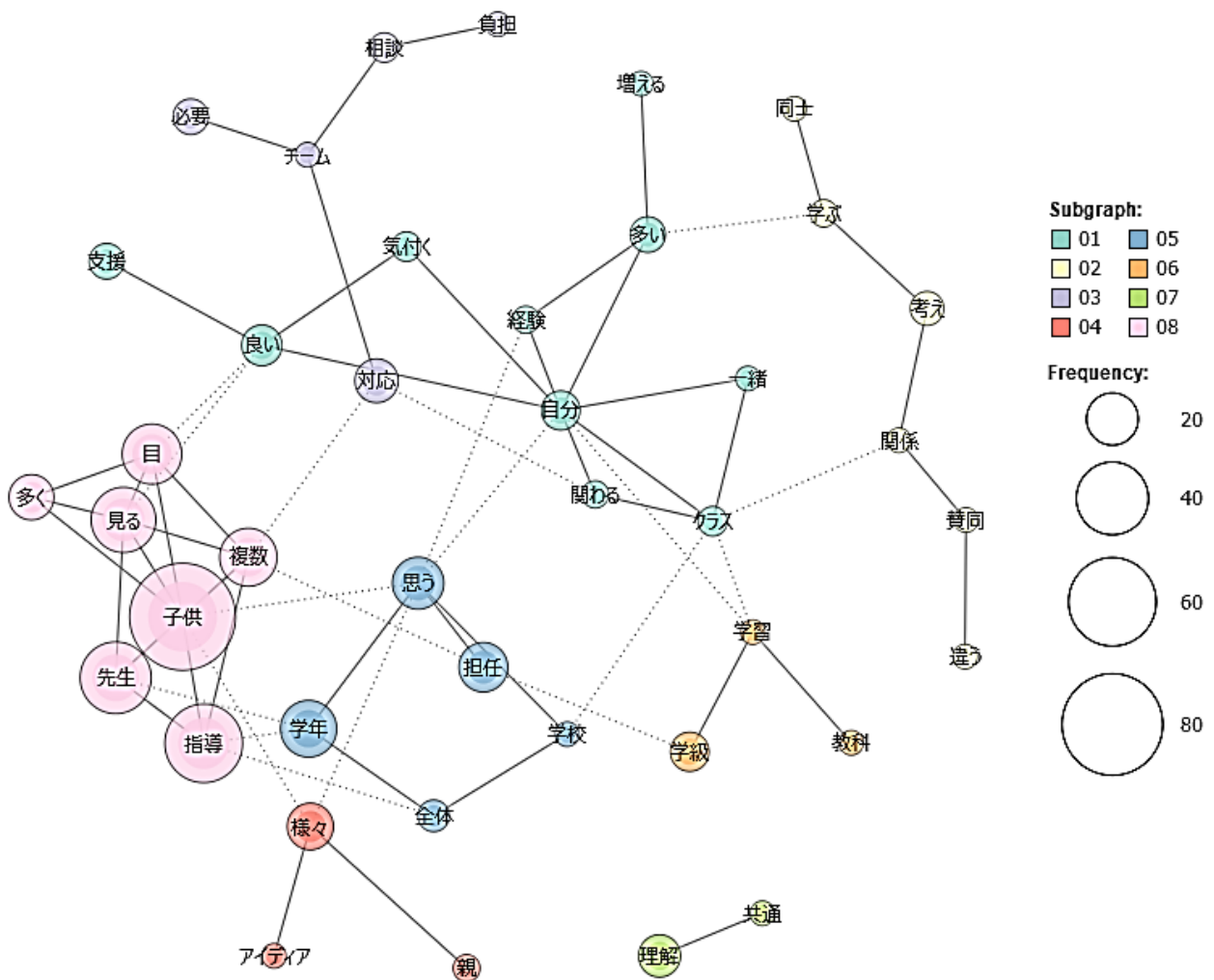


図1 女性の共起ネットワーク



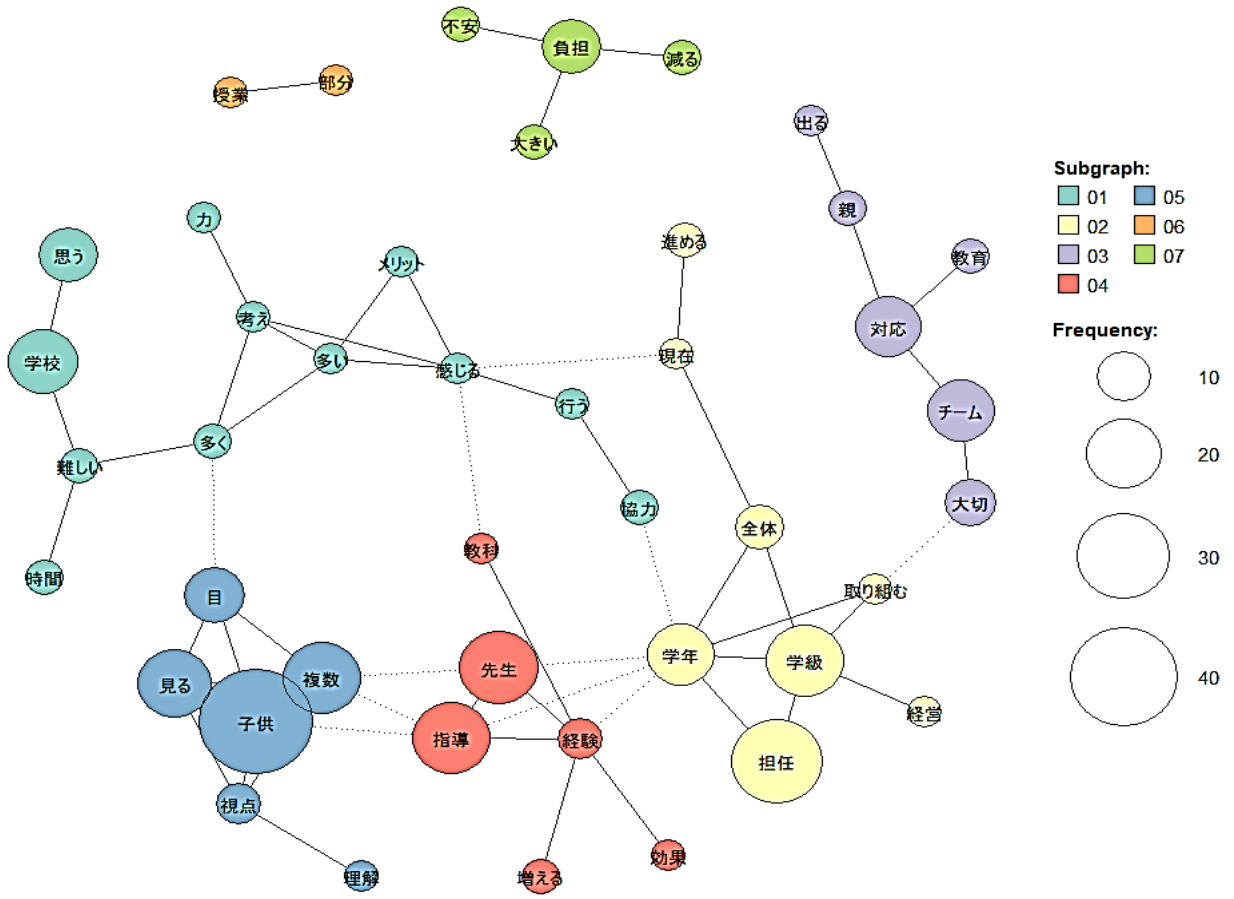


図2 男性の共起ネットワーク

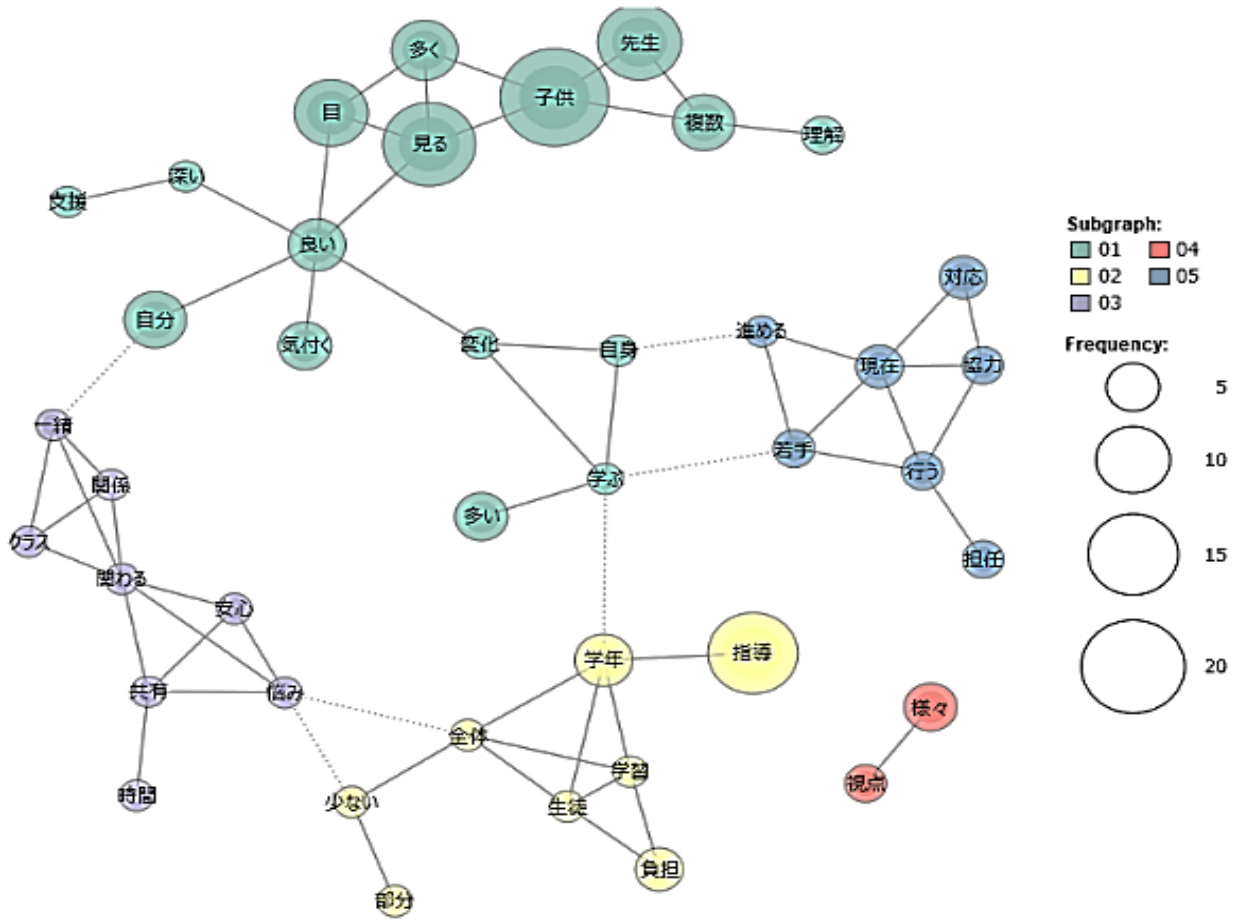


図3 20代の共起ネットワーク

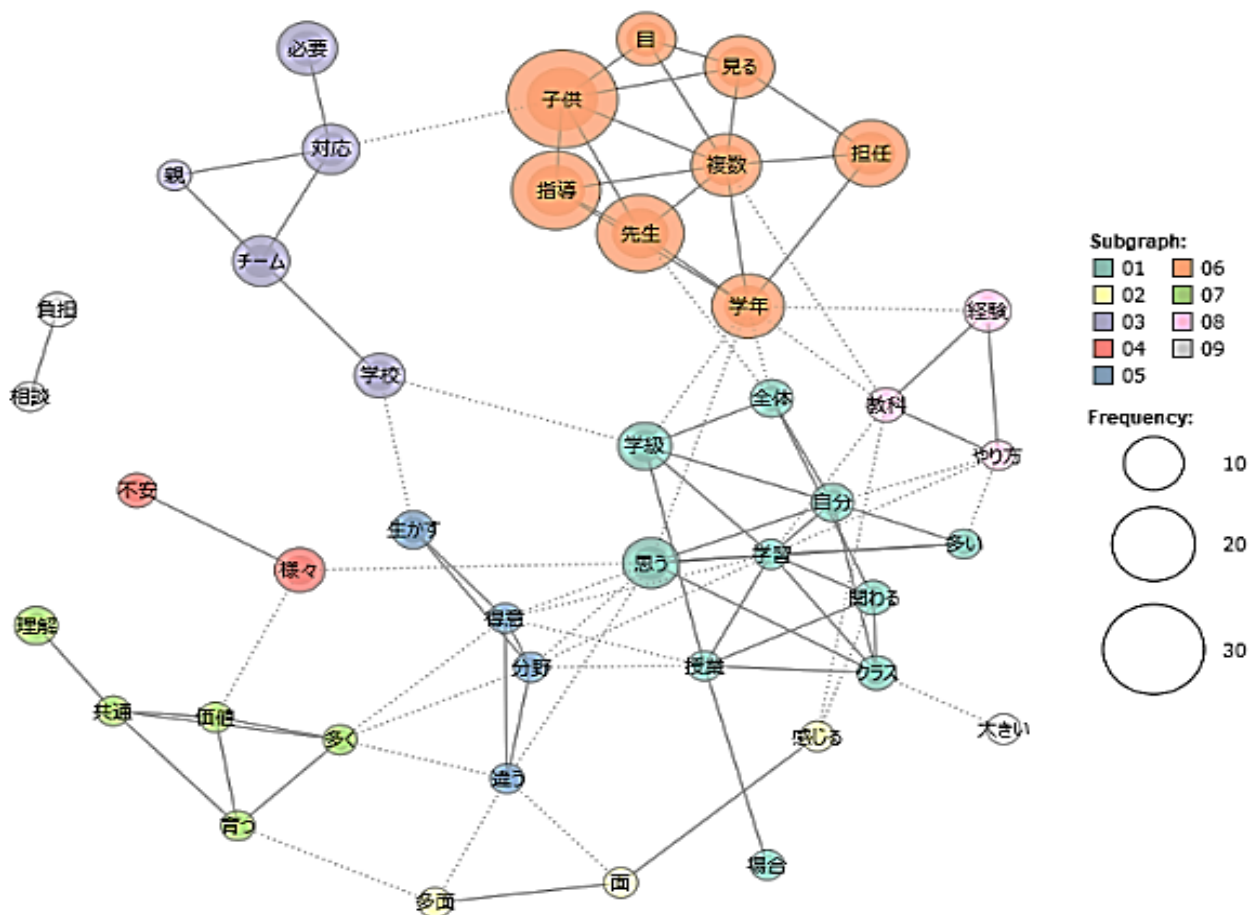


図4 40代の共起ネットワーク

注

印刷の都合上、色分けされた共起ネットワーク図1から図4は白黒になっている。

参考文献

文部科学省中央教育審議会(2015) 初等中等教育分科会資料2-3「文部科学省教員勤務実態調査—業務の分類」.

引用文献

文部科学省(2016)「公立学校教職員の人事行政状況調査:1-1-2. 精神疾患による病気休職者の推移(教育職員)(過去5年間)」.

文部科学省(2013)「教職員のメンタルヘルス対策会議の最終まとめについて」, p.12.

高橋典久・新井肇(2008)『同僚性をベースにした協働的生徒指導体制をどう構築するか?』, 月刊生徒指導. 38(10). pp.36-45.

文部科学省中央教育審議会(2006)「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申):これからの社会と教員に求められる資質能力」.

落合美貴子(2004)「教師バーンアウト研究の展望」, 人間性心理学研究 22(2), pp133-144.

金田裕子(2010)「学校における『協働』を捉える—授業研究を核とした教師たちの協働—」, 人間関係研究 9, pp.43-57.